

『源氏物語』「夕顔」の巻の一つの会話文について

室 城 秀 之

一

これまで、物語の会話文の認定の問題に関して、いくつかのささやかな論を発表してきた。^{注1}現代の小説のように、作者自身が会話文の範囲を「」などで示すことのない古代の物語（物語に限ることではないが）において、会話文の認定は、結局、私たちが作品をどう読むのかという、読む者の判断（解釈）に託されているということである。自分自身も注釈書を作る立場にありながら、授業では、注釈書に読まされるなどということを経験（学生にはほとんど理解してもらえないだろうということを経験しつつも）口がすっぱくなるほどに言ってきた。写本で読むことを課しながら、結局は諸注釈書に引きずられながら読む結果になることが多いが、会話文に「」が付されている注釈書をテキストにする場合でも、せめて、この会話文の範囲の認定でいいのかという意識を常にもってほしいと願っている。

長く、「源氏物語」の大辞典の編集に携わってき^{注2}て、辞典の用例に、会話文の場合は「誰の、誰への発言」、心内文の場合は「誰の心内」と明記する必要から、一時期、「源氏物語」の

会話文の現行注釈書の認定をそのまま認めていいのかというテーマを自分自身に課して、数ヶ月、「源氏物語」全巻を通して目を通した。その結果、会話文の認定に関して、これまでの注釈書はまちがっているのではないかという箇所を見つけることができた。その一つ、「玉鬘」の巻の会話文に関しては、本来は「落窪物語」に関する論文ではあったが、物語の会話文の認定の問題の例として報告した。^{注3}

今回は、まだ報告していない、「夕顔」の巻の一つの会話文について、簡単に書くことにする。

二

問題とする箇所は、「夕顔」の巻の、光源氏と惟光^{これみか}の会話部分なのだが、その少し前から、物語の文脈を追ってみた。

光源氏は、八月十五日の夜、夕顔のもとを訪れ、明け方近くになって、何がしの院に連れ出す。供をしたのは、夕顔の乳母子^{ちのこ}の右近だけだった。十六日の日が高くなつてから起きた光源氏は、その日は、夕顔とともに過ごす。光源氏の乳母子の惟光も、光源氏が何がしの院を訪れたことを知って、果物などの世

話をしたが、その後は、何がしの院を去っていた。その日の宵が過ぎる頃、光源氏が夕顔と寝ていた時、夢で、枕もとに「いとをかしげなる女」が現れ、「おのがいとめでたしと見奉るをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつられ」と言う。必ずしも解釈が定まっていない部分だが、今はそれにふれない。目を覚ました光源氏は、魔除けのために太刀を抜き、右近を起す。光源氏は、西の妻戸に出て、何がしの院の預かりの子を呼び寄せ、惟光がどこにいるのかを問う。惟光は、暁に迎えに来るつもりで、一旦、病に臥せている母大武の乳母のもとに帰っていたのだ。光源氏がふたたび夕顔のもとに戻った時には、夕顔はすでに息絶えていた。光源氏は、再度預かりの子を呼び寄せ、惟光と兄の阿闍梨を呼んで来るように命じる。そのうちに、次第に夜明けが近づいてきていた。

やつのことで、惟光が参上した。息絶えた夕顔を、一人気丈に抱きかかえていた光源氏は、緊張が解けてほっとして、夕顔を失った悲しみをあらたにし、激しく泣く。しばらくして心を静めてから、光源氏は、惟光に語りだす。

ややためらひて、「ここに、いとあやしきことのあるを、あさましと言ふにもあまりてなむある。かかる、とみのことには、誦経などをこそはすなれとて、そのことどももせさせむ、願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよと言ひつるは」とのたまふに、「昨日、山へまかり上りにけり。

まづ、いとめづらかなることに侍るかな。かねて例ならず御心地ものせさせ給ふことや侍りつらむ」一さることも

なかりつ」とて泣き給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人も、いと悲しくて、おのれも、よよと泣きぬ。

「ここに、いとあやしきことのあるを」以下は、光源氏の発言である。「いとあやしきこと」とは、夕顔が突然に死んだことをいう。そのために誦経をさせ、願なども立てさせようと思つて、惟光の兄の阿闍梨に来てくれるように、この院の預かりの子に言つておいたのだがどうなったのかと、一人で参上した惟光に問う。「ここに……」の部分に、大島本は、「源ノ惟ノ御詞」と傍記を付している。この光源氏の問いに、惟光は、阿闍梨は、昨日すでに比叡山に戻つたために一緒に連れて来られなかつたと答え、夕顔の突然の死に驚き、以前から気分が悪かつたのかと尋ねる。「昨日……」の部分に、大島本は、「惟光力詞」と傍記を付している。この惟光の発言は、「と申せば」のような地の文がないまま、光源氏の「さることもなかりつ」という発言に切り替わる。「さることも……」の部分に、大島本は、「源ノ御詞」と傍記を付している。このように、「と申せば」のような地の文がないまま発言者が切り替わることを読みとることは、写本を読む時にはかなりな困難をとまなうが、このような傍記に導かれることによって、正しく解釈することができる。ここで、惟光の発言から光源氏の発言に切り替わることは、前の光源氏の発言が「とのたまふに」と、主体敬語で受けられ、その後の発言が「とて泣き給ふさま」と、同じく主体敬語で受けられている不自然さと同時に、惟光の発言の一文一文にあつた「まかり上りにけり」「侍るかな」「侍りつらむ」という対象敬語が、「さることもなかりつ」の部分にはないことから判断された注

積的な読みによるのである。

これまで幾度か発言してきたことだが、作者自身が会話文の範囲を「」を付すことによつて示す現代の小説とは違つて、古典文学の会話文の範囲の認定は、この大島本の傍記のような注釈的な読みにささえられていることを、あらためて感じざるを得ない。

三

本稿で問題にしたいのは、この後の会話文なのだが、ここまですべて確認してきた敬語の問題について、少し後の部分の会話文を見ておきたい。

惟光の進言に従つて、何がしの院を出ることを決意した光源氏は、夕顔の遺骸の処置に心を悩ませる。

「さて、これより人少ななる所は、いかでかあらむ」とのたまふ。「げに、さぞ侍らむ。かの古里は、女房などの、悲しびに堪へず泣き惑ひ侍らむに、隣繁く、咎むる里人多く侍らむに、おのづから聞こえ侍らむを、山寺こそ、なほ、かやうのことおのづから行き交じり、物紛るること侍らめ」と思ひまはして、「昔見給へし女房の、尼にて侍る、東山の辺に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みづはぐみて住み侍るなり。あたりは人繁きやうに侍れど、いとかこかに侍り」と聞こえて、明け離るるほどの紛れに、御車寄す。

「さて、これよりは」の部分に大島本には傍記がないが、これは、光源氏の発言であることが明瞭だからか。夕顔の遺骸をこ

のままにしてはおけないと思つた光源氏は、この何がしの院以上に「人少な」な所に移したいと考へて、惟光に問う。惟光は、夕顔がいた宿に返すわけにはいかないと「思ひまはす」。この部分が、「と思ひまはして」とあつても、心内文ではなく、光源氏への発言であることは、対者敬語「さぞ侍らむ」「泣き惑ひ侍らむに」「多く侍らむに」「聞こえ侍らむを」「侍らめ」があることから明らかである。大島本も、「げに」の部分に、「惟光詞」と傍記を付している。惟光は、光源氏に、昔会つたことのある女房が尼となつてゐる東山に夕顔の遺骸を移すことを提案する。そこには、惟光の父の老乳母が住んでいて、人家は多いが、ひっそりとしたもの静かな所だという。この発言には、大島本の傍記はない。この惟光の発言にも、「見給へし女房」尼にて侍る」「乳母に侍りし者」「住み侍るなり」「人繁きやうに侍れど」「いとかこかに侍り」と、対者敬語が頻出する。惟光のこの二つの発言の五つの文には、実に、十一の対者敬語が用いられている。

夕顔の遺骸は上筵にくるまれて、車に乗せられて東山に送られた。この車には右近も同乗し、惟光は歩いて車について行つた。光源氏は、「はや、御馬にて、二条の院へおはしまさむ、人騒がしくなり侍らぬほどに」と言われて、惟光の馬に乗つて、二条の院に帰つて行つた。

四

本稿で問題にしたい部分に戻らう。これまで見てきた二つの場面に挟まれた部分である。新日本古典文学大系の本文をあけ

てみる。

さ言へど、年うちねび、世中のとある事としほじみぬる人こそもののおりふしは頼もしかりけれ、いづれもく若きどちにて、言はむ方もなけれど、「この院守などに聞かせむことはいと便なかるべし。この人ひとりこそむつましくもあらめ、をのづからもの言ひ漏らしつべきくゑぞくもたちまじりたらむ。まづこの院を出でおはしましたね」と言ふ。

「この院守などに……」の部分に、新日本古典文学大系は、「惟光の言。評判が立つことを恐れる。」と注をつけている。この部分を惟光の発言と解するのは、新編日本古典文学全集をはじめ、諸注釈書が一致するところで、新編日本古典文学全集は、「この人ひとりこそむつましくもあらめ」の部分に、「源氏と親密な仲だから秘密を守るだろう、の意。惟光は緊急事態と知るや、ときはきと対処の手段を講じ始める。」と注をつけている。この部分には、発言者を示す大島本の傍記はないが、たとえば、「岷江入楚」が「この人ひとりこそむつましくもあらめ」の部分に、「此院守ひとりはしたしけれとも下々の物いひもらすへければかくさんと惟光の申也」と注をつけているように、長い注釈史の読みにささえられた解釈なのだろう。でも、なぜこの惟光の発言には、この場面の前後であれほど頻出していた対象敬語が一つも見えないのだろうか。これまでの注釈書は、そのことに疑問をもたなかったのか、それとも、疑問をもちながらも不問に付したのか。

あらためて、この発言を見てみよう。この発言の最後は、

「……。まづこの院を出でおはしましたね」と言ふ。

とある。「と言ふ」とあるのだから、最後が惟光の発言であることは動かない。「まづこの院を出でおはしましたね」の部分も主体敬語「おはします」と助動詞「ぬ」の命令形があるのだから、惟光が光源氏に発言したものである。問題は、

この院守などに聞かせむことはいと便なかるべし。この人ひとりこそむつましくもあらめ、をのづからもの言ひ漏らしつべきくゑぞくもたちまじりたらむ。

の部分である。この部分も、惟光の光源氏への発言ならば、対象敬語を用いて、

この院守などに聞かせむことはいと便なく侍らべし。この人ひとりこそむつましくも侍らめ、をのづからもの言ひ漏らしつべきくゑぞくもたちまじりて侍らむ。

となるべきではないのか。

この部分に対象敬語がないということは、これが惟光の光源氏への発言ではないということだろう。惟光の光源氏への発言ではないならば、たとえば、惟光の心内文と解することは可能だ。惟光は、この事態を院守が耳にしたらまずい、この院守一人なら、親しいからなんとかなつても、身内の者が人に漏らすかもしれないと考えて、光源氏に、「まづこの院を出でおはしましたね」と提案したと読むことになる。心内文から会話文へと切り替わることも、物語の表現としてあつてもいいと思うが、この緊迫した場面で、惟光の心内が語られることは不自然な感じがいなめない。

いま一つの解釈は、この部分を惟光の発言ではなく、光源氏

の発言として読むことである。「とのたまへば」のような地の文がないまま発言者が切り替わることがあることは、すでに確認した。この会話文の前には、「一言へど、年うちねび、世中のとある事としほじみぬる人こそもののおりふしは頼もしかりけれ、いづれもく若きどちにて、言はむ方もなけれど」とある。「いづれもく若きどちにて」とは、光源氏と惟光の二人のことをいう。だから、この後の発言が惟光のものでなければならぬという理由はない。つまり、この後の発言が光源氏のものであることを妨げる理由はない。この院守は、前に、「むつまじき下家司にて、殿にも仕うまつる者なりければ」と紹介されていた。光源氏は、この親しい院守の身内の者から、今回の事態が世間に漏れることを心配する。これは、惟光に発した泣き言ではないのか。それを聞いた惟光は、この口をさえぎるように、「まづこの院を出でおはしましたね」と言ったのではないだろうか。今、この緊急の事態を回避するためには、光源氏を一刻も早くこの場から立ち去らせ、自分が責任をもつて遺憾を隠すことだと判断しての発言だろう。自分がどうしたらいいのか判断できずに泣き言を言う光源氏と、光源氏の身に害が及ばないようにとつさに判断する惟光。この主従の関係を描いたのが、この会話文ではないかと思う。

あらためて、この部分の本文を作ると、次のようになろう。

一言へど、歳うちねび、世の中のとあることとしほじみぬる人こそ、物の折節は頼もしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、言はむ方もなけれど、^{光源氏}「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。この人一人こそむつ

ましくもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷属も立ち交じりたらむ」「まづ、この院を出でおはしましたね」と言ふ。

五

古典文学における会話文の認定は、それぞれの作品の注釈史にささえられている。だが、その注釈史による読みが万全であるという保証など何もない。私たちは、注釈史を尊重しながらも、注釈史によって読まされるのではなく、虚心に本文に向かう姿勢を常にもち続けることが必要なのである。

注1 「インタビュー」写本へのフィールド・ワーク」（『物語研究』2 二〇〇二年三月）、新版 落窪物語」（角

川書店 二〇〇四年二月）解説、「地券のゆくえ」（『落窪物語』の会話文）」（『国語と国文学』二〇〇五年

五月）。

2 「源氏物語」の大辞典に携わった成果の一つとして、『源氏物語大辞典』編集委員会編「源氏物語入門」

（二〇〇八年七月 角川書店）を刊行した。

3 注1の「地券のゆくえ」「落窪物語」の会話文。「落窪物語」における会話文の認定の問題は、単に技術的なものではなく、物語における地券の授与の問題に関わる大きな問題である。

4 「源氏物語」の本文の引用は、大島本の影印（角川書店）により、私に、本文を立てた。この本文も、「源氏物

語大辞典の編集委員会において、討議を重ねて立てたものである。

(本学教授)